

- 2019年度で工事が終了し、2020年度から2022年度は事業の効果評価のための3年間のモニタリングとして、以下の調査を実施している。
 - ・ 荒川太郎右衛門地区全体の調査：網羅的な調査
 - ・ 整備の効果を見る調査：目標種の出現の有無を確認する調査



自然再生事業の整備内容

● 3年間のモニタリングで新たに8種の目標種を確認しました。

全目標種	43種
事業開始時に確認された目標種	12種
モニタリング開始前までに確認された目標種	25種(新たに13種)
モニタリング終了時まで確認された目標種	33種(新たに8種)



新規に確認された目標種
サクラソウ



新規に確認された目標種
ナガボノワレモコウ

(写真なし)

新規に確認された目標種
コミミズク



新規に確認された目標種
ツミ



新規に確認された目標種
ドブガイ類



新規に確認された目標種
ネアカヨシヤンマ



新規に確認された目標種
クマコオロギ



新規に確認された目標種
エサキアメンボ

モニタリング後の自然再生事業地区の状況

上池旧流路整備地の評価

- 呑み口の切り下げによる荒川本川からの流入頻度・流入時間の増加が評価できる。流入頻度は計画1.5回/年に対して、新呑口実績は1.8回/年（21回/12年）と概ね計画通りである。
- 呑み口・導水路や掘削等の整備によって上池の開放水面が創出されたと評価できる。開放水面の面積は7.8倍に拡大。
- 呑み口等からの流入によって、開放水面が形成され、魚類・底生動物の生息環境が形成された結果、経年的な変動はあるものの一定数が確認されていることが開放水面の形成の効果と評価できる。



2013.4.26（整備直後）



2019.10.24（台風19号による出水後）



2022.4.25



呑口の整備写真

上池旧流路保全地区

- 生育環境の確認として、当該箇所付近の地下水位を確認すると上流側の上池旧流路整備地を整備した後も地下水位が維持され、当該箇所が保全されていることが確認でき、エキサイゼリとオナモミは、年ごとに変動はあるものの、大きくは同様の範囲に継続的に確認されていることから、生育環境は保全されていることが評価できる。

上池旧流路保全地区の目標種の確認状況（調査回の合計株数）

目標種	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
調査回数	2回	2回	1回	1回	2回	2回	2回	2回	2回	2回	2回
イチョウウキゴケ									約1050	約50	約30
エキサイゼリ	約640	62	約120	約180	約120	約250	約360	約490	約150	約200	約200
タコノアシ						1			約38	25	28
ヒシ	約300	約600	約300	約300	約450	約300	約600	約600	41	1	約220

中池・下池旧流路の評価

- 中池・下池の開放水面は、維持され、水質及び魚類・底生動物も経年的に維持されていることから保全されていると評価できる。

中池・下池旧流路の評価

- 整備によって地盤高の低い湿地環境が創出されたと評価できる。整備によって、上池モトクロス場跡地整備地Aではオギ群落から湿性のヨシ群落が創出されている。モトクロス場跡地整備地Dでは一面が乾性の草本群落であった環境が、出水時には冠水し、止水環境・湿地環境が創出されている。
- 湿性の植物、鳥類、両生類も経年的に確認され、湿地・止水環境の拡大の効果が評価できる。

■モトA (2011整備地)



2012.4.24 (整備直後)



2022.4.25

■モトA (2013整備地)



2012.4.24 (整備直後)



2022.4.25

■モトD (2011整備地)



2012.4.24 (整備直後)



2022.4.25

■モトD (2013整備地)



2012.4.24 (整備直後)



2022.4.25

河畔林の保全の評価

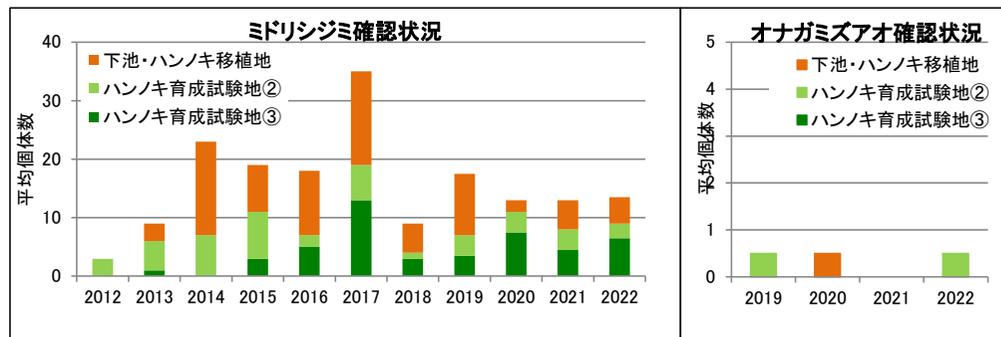
- 事業としては、民有地を国有化しており、その効果として河畔林が整備の本格施工開始直後の2009年度は32,712m²であったものが2019年度は41,679m²と増加していることが確認できるため、事業の効果が評価できる。

ハンノキ林の保全・再生の評価

- 土地の国有化によりハンノキ林全体の面積が増えたことが評価できる（休耕地等にハンノキ林が成立したと推測される）。
- 基盤整正を行い計30本程度のハンノキを移植した他、新たにハンノキ林が形成できる環境を2016年度（H28）～2019年度（R1）にかけて約12,000m²整備した。移植箇所ではハンノキが順調に生育し、整備箇所ではハンノキの幼木が発生していることから、整備以前からのハンノキ林が高木・壮齢樹化する一方で移植や整備によって若齢樹の育成が進んでいると評価できる。
- 2017～2019整備地に形成された水面は「湿地及び止水環境の拡大」に寄与している面はある。

ハンノキ林の面積比較

植物群落名	面積(m ²)	
	2009年	2021年
ハンノキ群落	23,524	69,153
ハンノキ（低木林）	32,896	0
ハンノキ植林	0	4,825
合計	56,420	73,978



ミドリシジミ・オナガミズアオ確認状況

整備地の状況(2021.10.19)



整備地から発生した幼木(2021.12.12)



整備地周囲の平場から発生した幼木(2022.6.18)

